

第 33 回 歴史リレー講座「聖徳太子の仏教と政治」 千田 稔氏 (H29.6.18)

605 年、聖徳太子は政治哲学「和を以て貴しとなす」を掲げ、飛鳥から斑鳩へ移り住みました。そして斑鳩宮のすぐそばに斑鳩寺（若草伽藍）を造ったのは「宮と寺とが寄り添う配置」を表現し、政治への仏教導入を進めるためでした。称徳天皇まではこの哲学が受け入れられましたが、794 年、政治の一新を目論む桓武天皇は平安京へ都を遷してしまいました。その後は平城京の時代に見られたような人間性を重んじる時代が訪れなかったことをみると、太子から聖武天皇、称徳天皇にかけての流れは歴史上特別な時代といえます。

十七条の憲法は、のちに憲法らしく整理された可能性はあるものの、根幹の部分は太子の手によるものです。第一条「和を以て貴しとし…」は、仲良くなれる方法をみんなで考えようという意味。第二条は「篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり。…」敬うべき対象に意外にも天皇は登場しません。ところが第三条「詔を承りては必ず謹め。君は天なり。臣は地なり。…」は明らかに天皇制を表しています。歴史学者の坂本太郎氏は著書『聖徳太子』の中で、第二条と第三条に関して鋭い考察を試みました。君・臣・民の身分設定は、仏・菩薩・衆生にたとえられた。君（仏）や臣（菩薩）の利他業によって民（衆生）の幸福が得られる。太子はこうした仏国浄土の理想像を描きながら憲法を作ったのではないか、というわけです。

この利他業を実践したとされる僧が、奈良時代に活躍した行基菩薩です。律令から逸脱した布教活動ゆえ僧侶の地位を剥奪されてもなお、貧しい人々を救済する道を諦めませんでした。残念ながら現代においてはこの利他業の精神がすっかり置き去りにされています。

太子の「宮と寺とが寄り添う」理念は天皇にさえも影響を及ぼしました。天皇の本来の仕事は神祀りです。にもかかわらず、舒明天皇は 639 年、百済川のほとりに大宮と大寺（百済大寺）を造っています。桜井市の吉備池で発見された吉備池廃寺がこの百済大寺だと考えられています。ところが、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」には、「舒明天皇 11 年、百済川のほとりの子部社を切り開いて百済大寺を造る」と見えます。子部社は現在の橿原市飯高にあるので、曾我川が百済川に相当します。加えて、大宮が見つからないことや移転説も説得力に欠けることから、吉備池廃寺を百済大寺とみなすには疑問が残ると言わざるを得ません。

また、「大安寺資財帳」には「百済大寺を百済の地より高市の地に移す。さらに天武天皇 2 年に高市大寺と名を変え、同 6 年には大官大寺に寺号を変えた」とあります。大官は天皇を意味するので、天武天皇も太子に倣ったのでしょう。藤原京時代の文武天皇も大官大寺を建立していますが、「天皇が寺を造るとは何ごとか」という藤原氏らの反発を受けて大宝元年以降は大安寺に名を変え、遷都に伴って平城京へ移されました。遡って百済大寺の起源は熊凝精舎で、大和郡山市額田部の額安寺を指すと言われます。しかし、その根拠は大安寺の平城京移設に貢献した僧、道慈の出身地ということだけです。実際、平安時代の歴史書『日本三代実録』には「聖徳太子平群郡に熊凝道場を創建し給ふ」という記録が残っています。

続く聖武天皇の時代には恭仁京、紫香楽宮などへの遷都が繰り返されたのち、元の平城京に戻りました。東大寺大仏造立の詔には「三宝の威霊に頼って、天と地の安泰を願い…」とあり、仏を国家の最高位と見なしたことが伺えます。また、娘の称徳天皇（重祚）は孝謙天皇時代に西大寺を建立しています。このように、太子が理想とした仏教世界を政治手法に投影するために、天皇は信仰の場所としての寺を造る必要がありました。しかし、称徳天皇の死後は藤原氏の推す光仁天皇が即位し、仏を絶対的な存在とする太子の考えは影響力を弱めていきます。こうして天皇の仕事は本来の神祀りに落ち着いたのでした。

最後に、太子が亡くなった場所とされる飽波宮について述べておきます。田村皇子（のちの舒明天皇）は推古天皇の命で病の太子を見舞いに法隆寺近くの飽波宮を訪ね、称徳天皇も道鏡とともに飽波宮を訪れています。場所は発掘調査の結果からみて斑鳩町の上宮遺跡が最も有力です。安堵町の飽波神社も候補地に挙げられますが、太子の「宮と寺とが寄り添う配置」を勘案すると、法隆寺から少々離れていることが難点です。

聖徳太子の仏教と政治

—推古朝から奈良時代末期まで—

©千田 稔



国家統治と仏教

「宮と寺とが寄添う配置」

聖徳太子 斑鳩宮 斑鳩寺
舒明天皇 百濟大宮 百濟大寺
(初めての天皇発願の寺)
聖武天皇 紫香樂宮 甲賀寺(大仏)
称徳天皇 弓削寺 由義宮
(道鏡)

なぜ聖徳太子は、
斑鳩に宮と寺を造ったか

斑鳩寺(法隆寺)と斑鳩宮



斑鳩寺 推古15年
(607)



斑鳩宮
推古13年(605)

斑鳩寺(法隆寺)の火災

『日本書紀』
天智天皇8年
(669)
是冬条「時に、
斑鳩寺に災(ひつ)
けり」
同9年4月条
「夜半之後に、
法隆寺に災けり。
一屋根も余る
こと無し」



「菩薩天子」

廃仏を行った北周に代わって隋を建国し、仏教復興に努めた文帝(在位:581～604年)のことであろう。

菩薩・・・成仏を求める(如来に成ろうとする)修行者

十七条憲法を再考する

十七条憲法

一に曰く、和を以て貴しとし、忤(さか)らふことなきを宗とせよ。……

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり。……

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君は天なり。臣は地なり。天は覆ひ、地は載す。

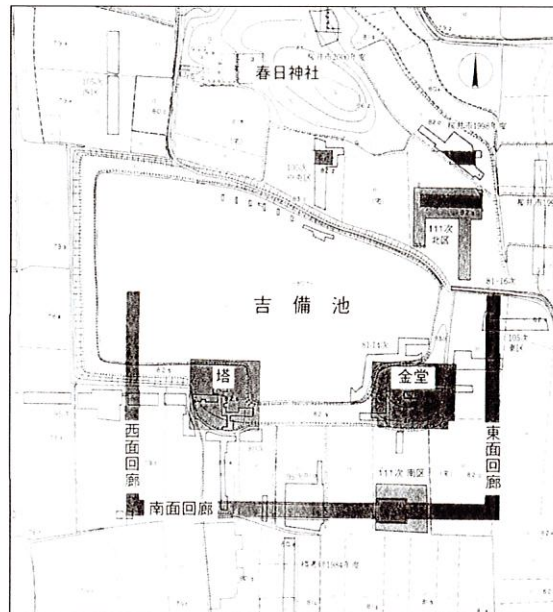
第二条の篤敬(とくけい)三宝の章、第十条の人は皆凡夫であるとする章などであるが、憲法で考えられている国家の人的組織、君・臣・民の三身分の設定は、私は仏国浄土の仏と菩薩と衆生との三大区分にたとえられたものだと思う。君は仏であり、臣は菩薩であり、民は衆生である。菩薩の利他行によって衆生は救われる。国も群卿百寮の誠意と恪勤(かくきん)によって民生の安定が得られねばならぬ。太子は胸中にこうした仏国浄土の姿を描いて憲法の条章を作ったのではあるまいか。
(坂本太郎『聖徳太子』)

舒明天皇11年(639)

七月に、詔して曰はく、「今年大宮及び大寺を造作らしむ」とのたまふ。則ち百済川の側(ほとり)を以て宮処とす。是を以て、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。便(すで)に書直県(ふみのあたひあがた)を以て大匠(おほたくみ)とす。



吉備池廃寺周辺



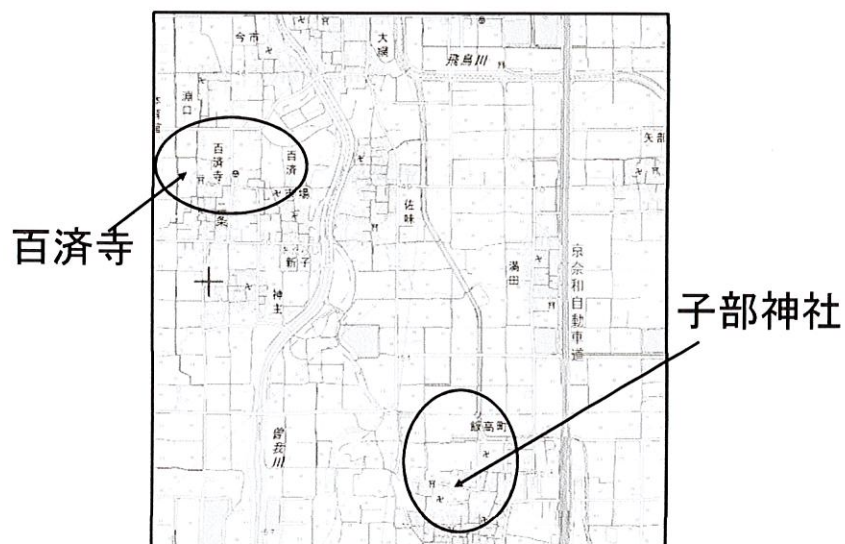
吉備池廃寺跡平面図

「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」
 舒明天皇11年2月：百済川ほとりの
 「子部(こべ)社」を切りひらいて
 百済大寺を造る。

社地を切りひらいたことによって、
 神の怒りをかい、九重塔と金堂石鴟尾を焼失
 する。

子部社 橿原市飯高
 百済川 曾我川にあてゐる。

吉備池廃寺を百済大寺とみなすことに疑点が残る。



「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」

百済大寺を百済の地より高市の地に移す。

天武2年(673)高市大寺

天武6年(677)大官大寺に寺号を変える。

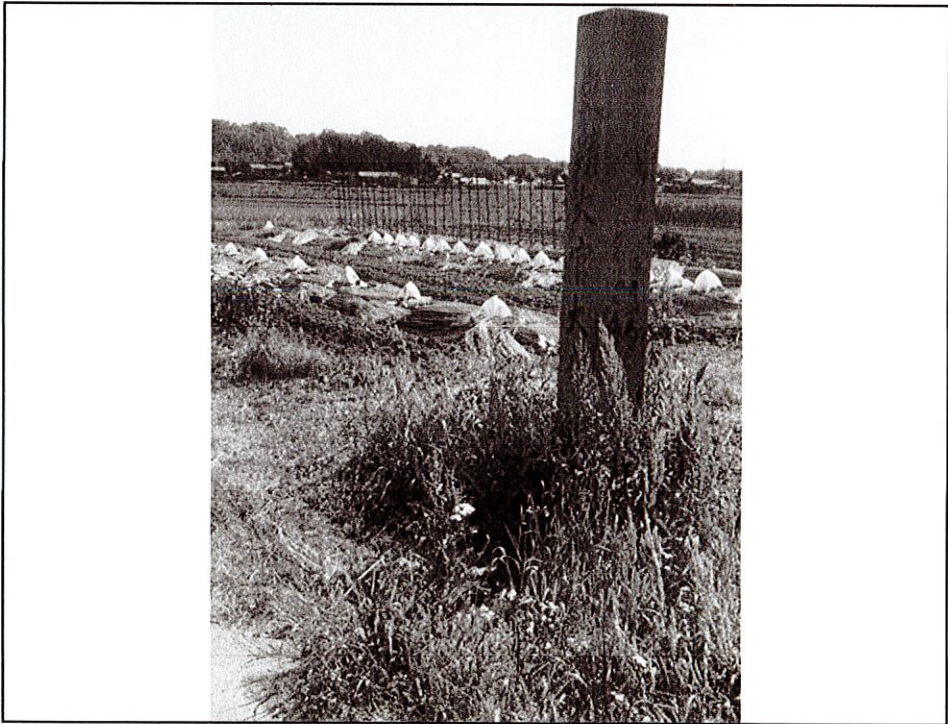
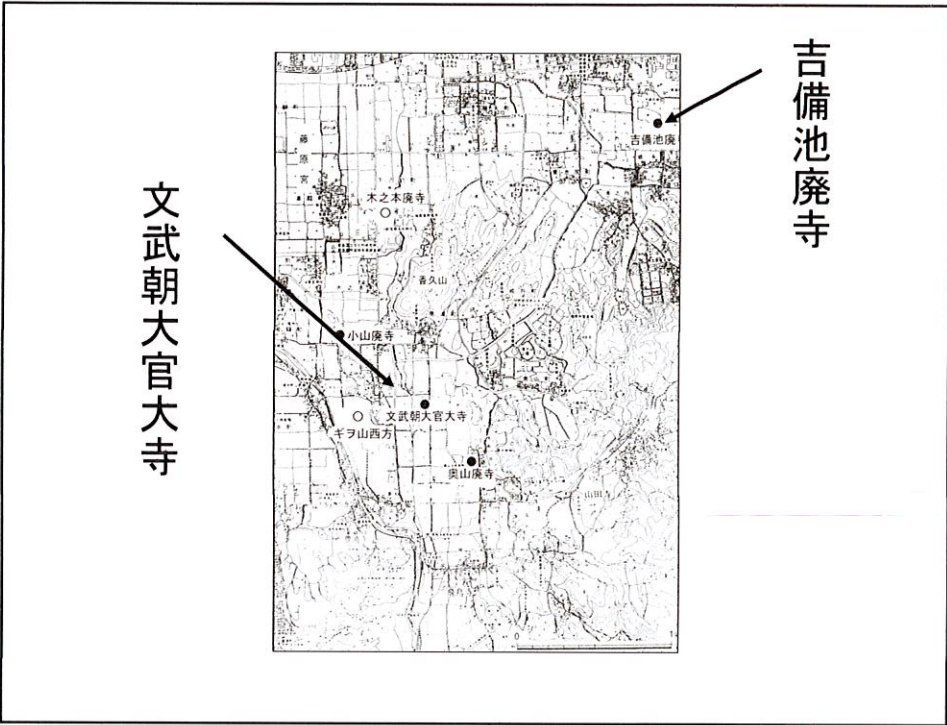
天武・持統朝 大官大寺(大官=天皇)



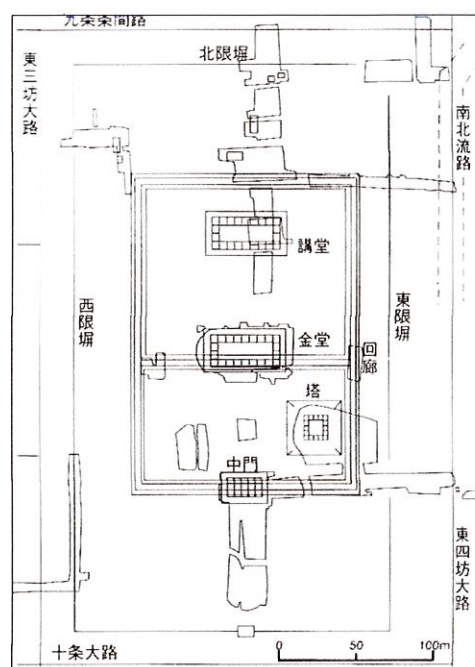
(文武朝大官大寺)

『日本書紀』

大宝元年以降 大安寺(大安=大いなる安らぎ?)



大官大寺伽藍復元図



(熊凝精舎)



百濟大寺



高市大寺(?)



大官大寺



大安寺

なぜ熊凝精舎に起源を求めたか？

熊凝とはどこか？

『日本三代実録』

元慶4年(880)10月20日条

『昔日、聖徳太子平群郡熊凝道場を創建し
給ふ』

(参考)人名 大伴熊凝 肥後國益城郡

熊凝精舎

大和郡山市額安寺？

大安寺の前身とする

確証はない。道慈

(一744)額田氏

出身。

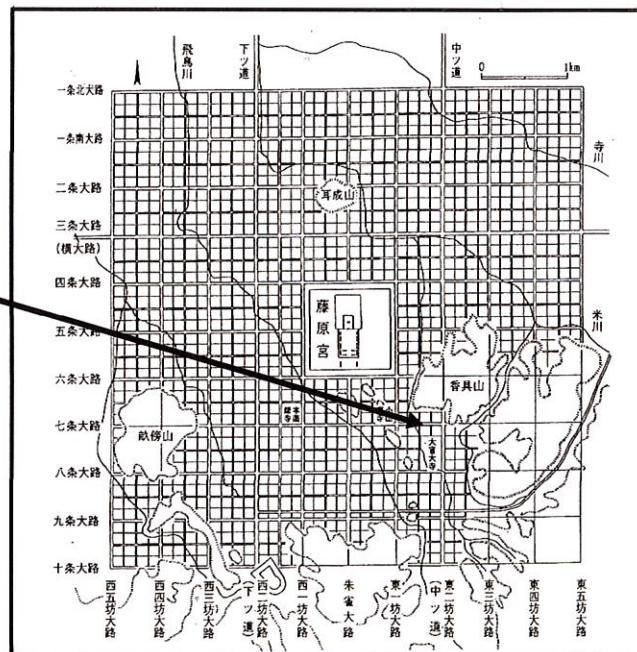
大安寺の平城京移設に

貢献。

額安寺班田図



文武朝
大官大寺
(大安寺)



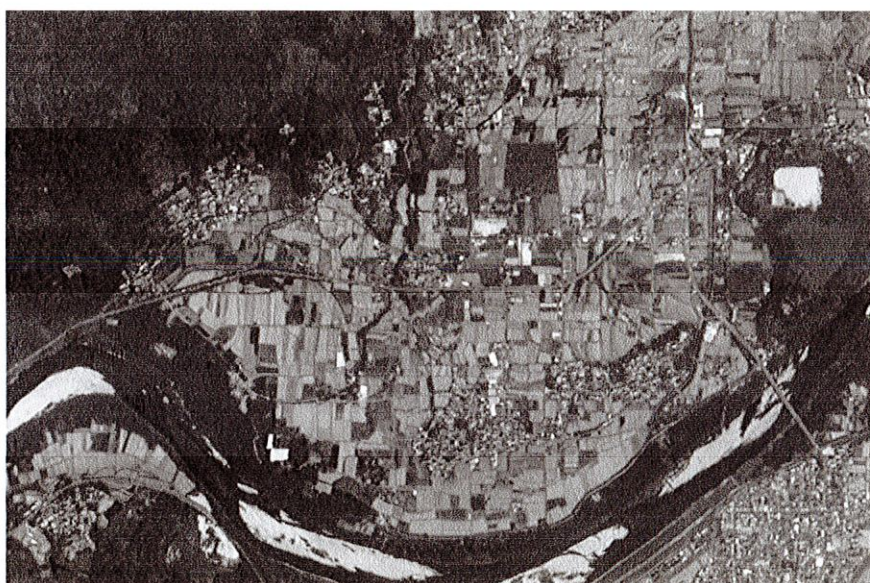
大藤原京小沢案

聖武天皇

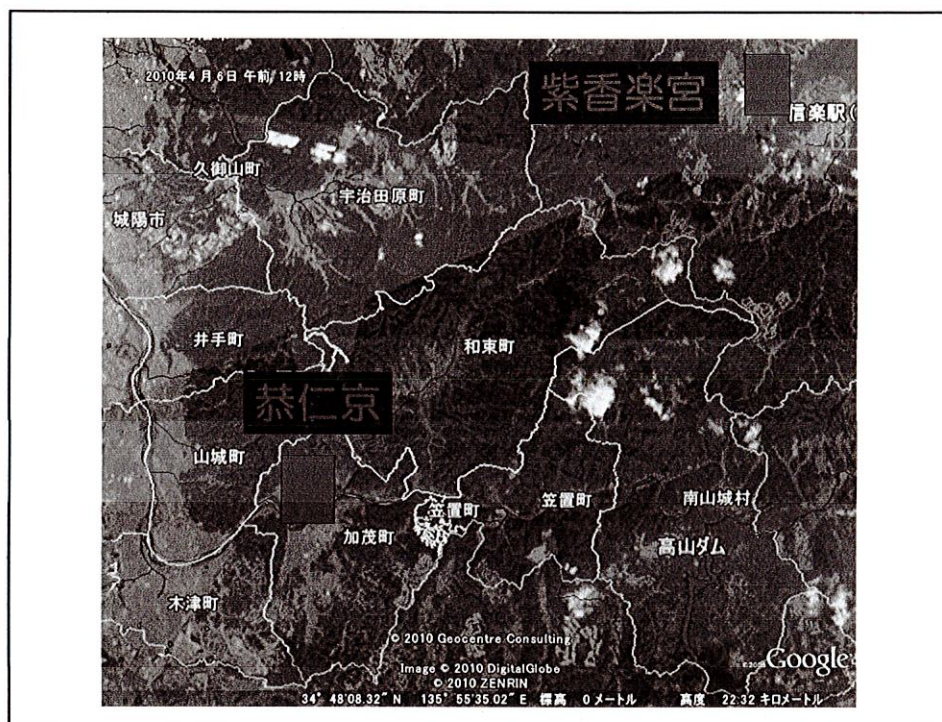
孝謙天皇

淳仁天皇

称徳天皇



鸕原離宮あたり



聖武天皇の大仏建立の意図

大仏に託する夢

天平15年(743)10月大仏造立の詔

…いまだ普天の下、法恩に浴していない。

誠に、三宝の威霊に頼って、天と地とは
安泰になり、万代までの福業を修めて、動植
ことごとく栄えんことを望む。

ここに天平十五年癸未の十月五日に、菩薩
(さとりを求める者)の大願をおこして、
盧舎那仏の金銅仏一体を造り奉る。

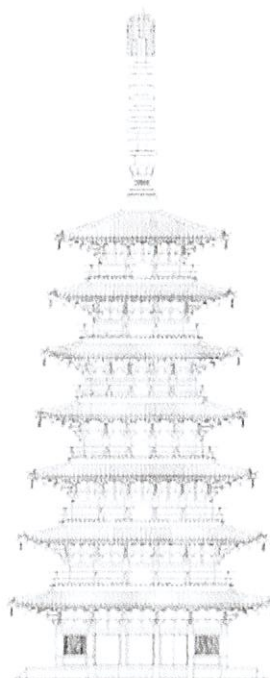
天皇＝菩薩 仏になろうとする修行者
仏に使える者としての天皇。

天皇＝神(最高神)とする関係とすれば、
仏に仕える神となる。

仏が国家の最高位となる。

金光最勝王経…この経を広め正法をもって
国王が施政すれば国は豊かになる。

天平勝宝元年4月
聖武天皇 東大寺行幸。
「三宝の奴としてつかえる」

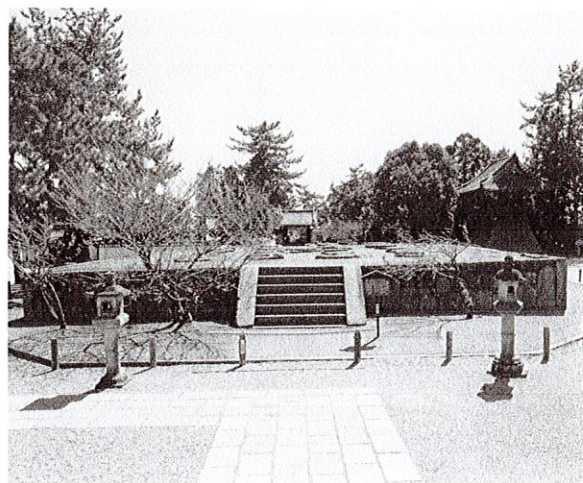


孝謙上皇 西大寺創建

天平宝字8年(764)9月、孝謙上皇は藤原仲麻呂の乱平定を祈願して金銅四天王像の造立を発願。

孝謙上皇は同年10月重祚(称徳天皇)。

翌天平神護元年(765年)、四天王像が造立。



天平宝字8年(764)

9月20日道鏡 大臣禪師となる。

天平宝字9年(765)

閏10月 弓削寺行幸 太政大臣禪師に任ぜられる。

天平神護2年(766)道鏡 法王となる。

神護景雲元年767年 法王宮職をおく。

神護景雲元年(767)4月26日

飽浪宮(あくなみのみや)に行幸し、法隆寺の奴婢27人に位を賜った。(神護景雲3年(769)10月15日にも行幸)

飽浪宮(あくなみのみや)

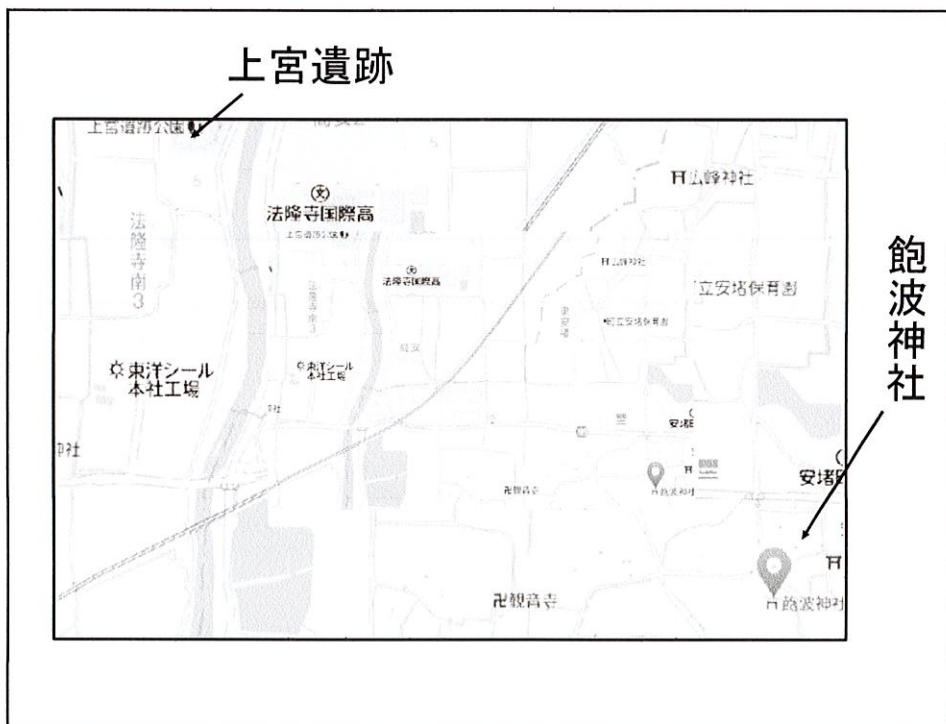
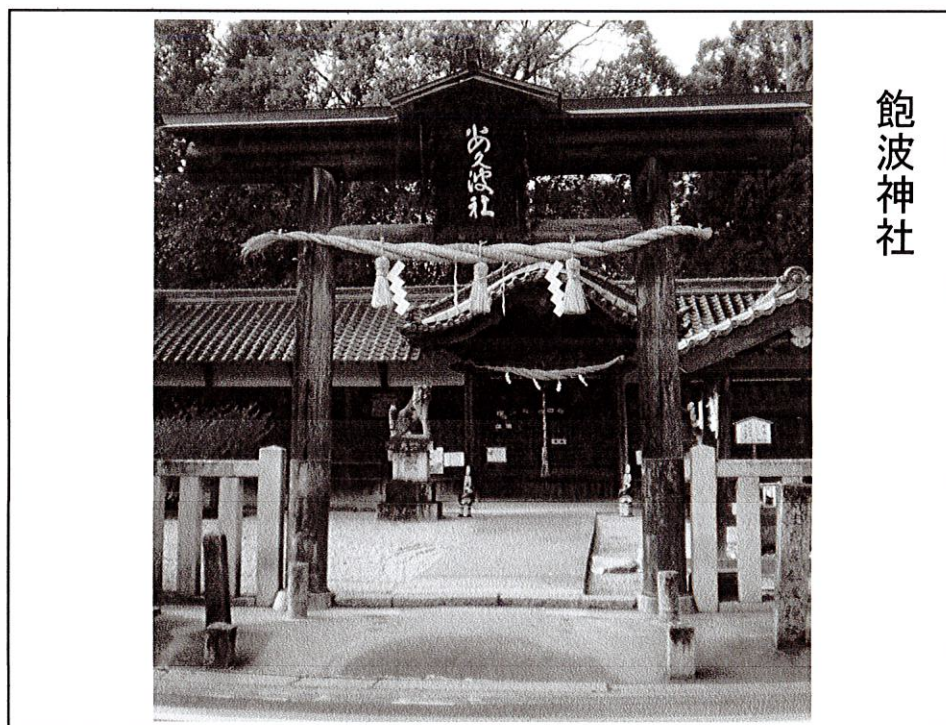
「大安寺資財帳」

推古天皇が田村皇子を飽波葦墻(あしがき)
宮へ遣わし聖徳太子の病を見舞う。

斑鳩町上宮(かみや)遺跡

安堵町東安堵 飽波神社





由義神社(八尾市八尾木北)の境内に
「由義宮旧址」の石碑

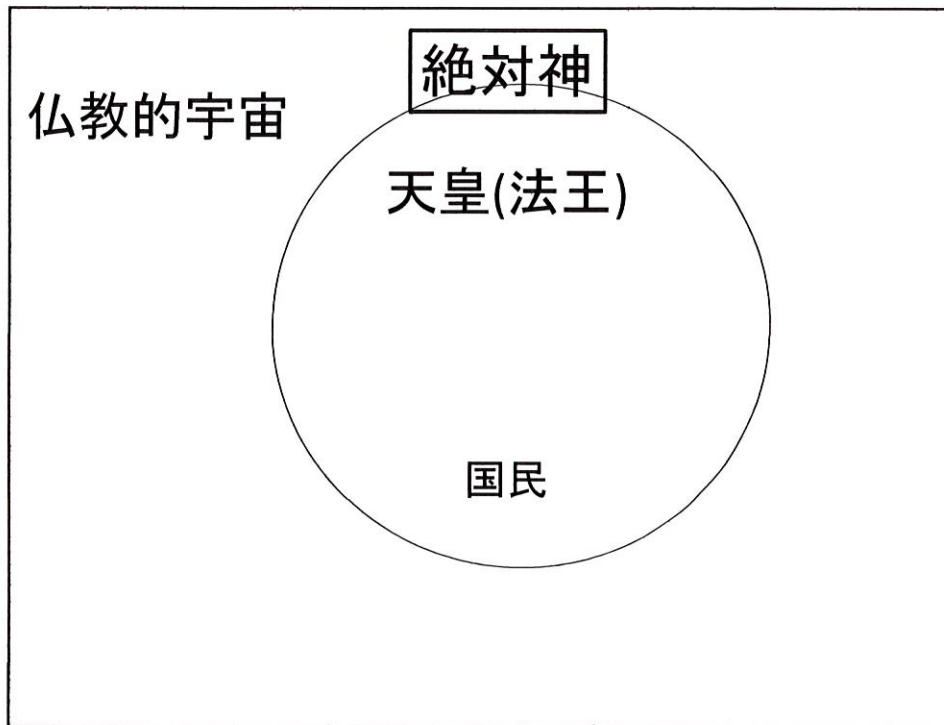


弓削神社(八尾市弓削町)



八尾の東弓削遺跡





ご静聴ありがとうございました